理論と論説

安中散の縮砂の出典

小山 誠次

The First Recipe for Amomi Semen to the Kampo Formula, Anchū-san

Seiji KOYAMA

M. D., Fushimi Clinic, 3-318, Ginza-cho, Fushimi-ku, Kyoto-shi, Kyoto 612, Japan

Abstract Anchū-san is included in the 'Tai Ping Hui Min He Ji Ju Fang' (a Song dynasty pharmacopoeia), with the constituent crude drugs listed as Kanzo (Glycyrrhizae Radix), Gengosaku (Corydalis Tuber), Ryokyo (Alpiniae Officinarum Rhizoma), Kankyo (Zingiberis Siccata Rhizoma), Uikyo (Foeniculi Fructus), Nikkei (Cinnamomi Cortex) and Borei (Ostreae Testa). However, in modern-day Japan, the same formula usually contains Keihi (Cinnamomi Cortex), Borei, Shukusha (Amomi Semen), Engosaku (Corydalis Tuber), Uikyo, Kanzo and Ryokyo. The 'Futsugo-yakushitsu-hokan,' (late 19th century) lists the latter formula in the section on decoctions and the former formula in the section on powdered medicines. In the 'Shochitekiyo' of the late Edo period (1603-1867), it is said that Hara Nanyo added Shukusha to the pharmacopoeia prescription, for a total of eight ingredients, and tripled the amount of Borei as another device. In 'Sokei-tei-iji-shogen,' (1820) the latter device is included with the note that it is effective for treating pyloric stenosis. The former device may well have been a secret formula of his family of physicians.

In many texts, uses of the formula, Anchū-san, were not limited to the directions given in the pharmacopoeia, and decocting the formula was relatively common. For severe cases of stagnation, the addition of Bushi (Aconiti Tuber) was recommended, and Shinra (river snail) was also used in place of the Borei.

Anchū-san appears primarily in texts from the late Edo period onwards. If copies of books with unclear dates are not considered, Anchū-san was not used significantly as a prescription until the 19th century.

Key words: Anchū-san, Amomi Semen, Hara Nanyo, 'Shochitekiyo', 'Futsugo-yakushitsu-hokan'

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 47, 289-295, 1996

(accepted 8 Jan, 1996)

緒言

安中散は、医療用漢方エキスを製剤として現在12社（15品目）の製品が薬価収載¹⁾されている。安中散の組成は桂皮、牡蛎、縮砂、延胡索、茴香、

甘草、良姜であり、1社は日局ケイヒに代えて桂枝を処方し、また別の1社は上記の一般的処方に茯苓を加味し、安中散加茯苓を安中散として製剤している。

もともと安中散は『太平惠民和劑局方』を出典

医、伏見診療所、京都、〒612 京都市伏見区銀座町3-318

[1996年1月8日受理]

とする方剤であり、同書巻之三・一切氣 附 脾胃積聚の宝慶新增方²⁾には、「安中散 治遠年日近脾疼飜胃口吐酸水寒邪之氣留滯於內停積不消胸膈脹滿攻刺腹脇惡心嘔逆面黃肌瘦四肢倦怠又治婦人血氣刺痛小腹連腰攻疰重痛並能治之（筆者訓読：遠年日近ノ脾疼飜胃，ロニ酸水ヲ吐シ，寒邪之氣内ニ留滯シテ停積消エズ，胸膈脹滿シ腹脇ヲ攻刺シテ惡心嘔逆シ，面黄ニテ肌瘦セ四肢倦怠スルヲ治ス。又婦人ノ血氣刺痛，小腹ヨリ腰ニ連ナリ攻疰重痛スルヲ治ス。並ビニ能ク之ヲ治ス）（筆者注：以後，本条文の部分的抜粋に留まる条文は訓読文を省略）」とあって，甘草十兩，玄胡索，良姜，乾姜，茴香，肉桂各五兩，牡蠣四兩が処方され，更に「右為細末毎服貳錢熱酒調下婦人淡酢湯調服如不飲酒者用塩湯点下並不拘時（筆者訓読：右，細末ト為シ毎服二錢熱酒ニテ調下ス。婦人ハ淡酢湯ニテ調服ス。如シ酒ヲ飲マザル者ハ塩湯ヲ用ヒテ点下ス。並ニ時ニ拘ラズ）」との服用指示がある。

すなわち『和剂局方』では縮砂は処方されず，元々はその代りに乾姜が配合されていた。また方後の服用指示については，煎用ではなく，散剤として熱酒，淡酢湯，塩湯などで内服とある。

今回，以上の点を踏まえて，縮砂を配合した安中散の出典について文献検索を行ない，検討を加えた。

本 論

I 『勿誤藥室方函』

安中散は中国においてよりも，従来より我が国においてよく処方されて来ている。

近年の安中散に関する詳細な論文としては，日本東洋医学会誌等4巻第3号誌上での矢数道明の「安中散に就て」³⁾が発表されているが，縮砂の出典については全く触れられていない。そのため，まず現代の我が国の代表的な処方集である『經驗・漢方処方分量集』⁴⁾と『漢方処方集』⁵⁾とを比較検討する。

前者では出典は『和剂局方』とあり，処方内容は縮砂配合の七味である。後者では出典はやはり『和剂局方』とあるものの，処方内容は乾姜配合

の七味であり，分量を除けばこれは正に局方記載の通りである。一方，服用法については前者は特に記載なく，そのため凡例によれば常煎法による指示となっている。後者はこれに対して局方指示の通り散剤としての内服であるが，熱酒，淡酢湯，塩湯などは記載されていない。従って，『漢方処方集』では原典にかなり忠実であると言えよう。

出典に関して言えば，後者では原典通りの薬味指示であるから特に問題はないが，前者では原典と異なる薬味が配合されているのに，それにもかかわらず出典が『和剂局方』とされているのは，厳密に言えば事実と異なると表現せざるを得ない。正確に表現すれば，縮砂を配合した安中散の原方の出典は『和剂局方』ということになるだろう。

そのため他書も含めて更に検討するに，平成7年によく一般の目に触れることが可能となった『北里研究所東洋医学総合研究所漢方処方集』⁶⁾では，出典は『勿誤藥室方函』とあり，処方内容は縮砂配合の七味であって服用法は常煎法である旨，指示されている。

縮砂配合の安中散の出典を『勿誤藥室方函』とすることについては，筆者もそれ以前に既に考えていた。すなわち，『和剂局方』には縮砂なく，茯苓は安中散加茯苓として一般に用いられ，縮砂の出典は『勿誤藥室方函』の煎薬部⁷⁾であり，同書の散薬部⁸⁾には『和剂局方』と同様の乾姜を配した処方が記載されていると。

『勿誤藥室方函』巻上⁷⁾には，「安中散 局方 治遠年日近，脾疼，飜胃，口吐酸水，寒邪之氣留滯於內停積不消，脹滿，攻刺腹脇，及婦人血氣刺痛。」とあって，縮砂配合の七味が指示されている。また，同書巻下・散薬部⁸⁾にも同一の条文（筆者注：読点の位置のみ異なる）が収載されているものの，薬味については乾姜配合の七味が指示されている。また，煎薬部においても散薬部においても服用法については特に指示はない。ただ後者においては，方後に「一方以辛螺代牡蠣亦可（筆者訓読：一方ハ辛螺ニテ牡蠣ニ代フモ亦可）」の一文が付記されているだけである。

Ⅱ 『証治摘要』

しかしながら、今回独自の調査によって、中川成章著『証治摘要』巻上・嘔吐反胃膈噎⁹⁾に、「和田氏云。癖囊。局方安中散。有効。南陽亦云。其方。甘草十両。宿砂，延胡，良姜，乾姜，茴香，桂枝，各五両。牡蛎四両。右八味為末。毎二錢熱酒調下。南陽去宿砂三倍牡蛎。水煎服。方後云。忌酒肉麵餅一切厚味塩茶。又小言有治膈噎。河豚魚方。(筆者訓読：和田氏云フ，癖囊＝局方安中散効有り。南陽亦云フ，其方ハ甘草十両，宿砂，延胡，良姜，乾姜，茴香，桂枝各五両，牡蛎四両。右八味末ト為シ，毎二錢熱酒ニテ調下ス。南陽宿砂ヲ去リテ，牡蛎ヲ三倍シ，水煎服ス。方後ニ云フ，酒，肉，麵，餅，一切ノ厚味，塩茶ヲ忌ム。又，小言ニ膈噎ヲ治スルニ河豚魚方有り。)」との記載を見出した。

この記述によれば、和田東郭は癖囊に局方安中散(筆者注：乾姜配合の七味)を処方したとあり、実際に『蕉窓雑話』巻之一¹⁰⁾には、「……癖囊ノ証モ一通ハ先安中散ニテヨケレドモ此症ニ痛ノ強ト和ラカナルトアリ……」と記載されている。一方、原南陽はこの局方安中散に縮砂を加味して八味として処方し、服用法については局方指示の通りとしている。すなわちここで縮砂を加味したのは、原南陽の独自の工夫であることが読み取られる。更に続いて、原南陽はまた別の工夫によって縮砂を去り、代りに牡蛎を三倍増量して水煎服用するべく指示したことも記載されている。

この後者の処方『叢桂亭医事小言』巻之四上・噎膈 反胃¹¹⁾に、「安中散 治癖囊病神驗 延胡 茴香 桂枝各五分 蛎粉一錢四分 良姜 乾姜各三分 甘草六分五厘 右七味水二合煮取一合服忌酒肉麵餅一切厚味塩茶(筆者訓読：安中散 癖囊病ヲ治ス。神驗アリ。……右七味，水二合ニテ煮，一合ヲ取りテ服ス。酒，肉，麵，餅，一切ノ厚味，塩茶ヲ忌ム)」と記載されている内容と一致するが、前者の処方は『叢桂亭医事小言』には記載がない。

Ⅲ 原南陽方

そのため筆者は、原南陽の著述を可及的に調査する目的で『叢桂亭医事小言』の外、『叢桂偶記』

と武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の『解毒奇効方』、『砒草』、『瘦狗傷考』、『寄奇方記』、『經穴彙解』、『痘瘡策』、『傷寒論夜話』、『南陽原子柔藏方』、『原南陽稿本』、『葉語』、及び京都大学附属図書館所蔵富士川文庫の『復坐録』等々を検索したが、僅かに『復坐録』の癖囊についての解説文¹²⁾中に、「……方ハ曼倩湯当婦湯安中散ノ類撰用スベシ……」と記載されているのみであった。

しかし『叢桂亭医事小言』巻之五に、「復中川修亭¹³⁾」という一文が記述されている。そこでは「……昨楊生来曰。西京中川君之書達求其報。僕遅緩之罪。不知所謝。論云。僕所著医事小言。嘗見写本四冊於浪華。後於京師見刻本二卷。被怪未全備。此書僕平日家居之雜話。以口授門人。子弟等筆記備遺忘。故其言極卑俚。終得六卷。其尾附弊家藏方。共為七卷。自以家伝禁方。不許示外人。何知誤落人間。伝写四方。殊多謬誤。大致齟齬。門人等患之。亦不可如之何也。乃相議曰。自以誤々人。不如公之。計上木甚急。仍先刻二卷。次年刻第三卷。今季又刻第四卷。書肆行当致京師。願賜覽觀。……(筆者訓読：昨，楊生来リテ曰フ，西京ノ中川君之書達シテ，其報ヲ求ムト。僕，遅緩之罪ニテ謝スル所ヲ知ラズ。論スニ云フ，僕ノ著ス所ノ医事小言，嘗テ写本四冊ヲ浪華ニ見，後京師ニ於テ刻本二卷ヲ見ルト。未ダ全備セザルヲ怪シマル。此書ハ僕ノ平日家居之雜話ヲ以テ門人ニ口授ス。子弟等筆記シテ遺忘ニ備フ。故ニ其言極メテ卑俚ナルモ終ニ六卷ヲ得。其尾ニ弊家ノ藏方ヲ附ス。共ニ七卷ト為ス。自ラ家伝禁方ナルヲ以テ外人ニ示スコトヲ許サズ。何ゾ知ラン，誤リテ人間ニ落ツルコトヲ。四方ニ伝写ス。殊ニ謬誤多ク，大イニ齟齬ヲ致ス。門人等之ヲ患フモ，亦之ヲ如何トモスベカラズ。乃チ相議シテ曰ク，誤リヲ以テ人ヲ誤ランヨリハ之ヲ公ニスルニ如カズト。上木ヲ計ルコト甚ダ急ナリ。仍リテ先ヅ二卷ヲ刻シ，次年第三卷ヲ刻ス。今季又第四卷ヲ刻ス。書肆行々當ニ京師ニ致スベシ。願ハクハ覽觀ヲ賜ハラシコトヲ。……)」とあって、『叢桂亭医事小言』の刊刻に至る経緯が略述され、それと共に刊本の出版以前には既に写本が出回っていたことが分かる。しかも門外の人間が伝写した

ものについては誤謬も多かったともいう。

このような中であって、中川修亭は原南陽の求めに応じて『叢桂亭医事小言』を覧観したのである。

なお、『叢桂亭医事小言』の現存する写本については『国書総目録』には「㊦乾々(欠本、二冊)」¹⁴⁾とあり、確かに『乾々斎架蔵和書目録』には「医事小言(原南陽)(零本)二冊 写」¹⁵⁾とあるが、現在の所在は不明である。もっとも、この写本が原南陽の門人が筆写したものかどうか、刊本以前のものかどうか、安中散の縮砂配合の口授を記述しているかどうか……等々、全て不明である。

恐らく原南陽は局方安中散を色々と工夫し、その一環として縮砂を加味して処方していたが、刊本を出版するにあたり、別の工夫として縮砂を去って牡蛎を三増量とする処方を公表しようと考えたのであろう。それ故、縮砂の配合は原南陽の独自の工夫であることに間違いはなく、これは原南陽一門の秘中の秘であったのかもしれない。

自己の一門の治療技術の卓越性を世間に周知させるためには、治療内容がある程度公表して衆目の賞賛を得る必要性はあっても、一門の秘中の秘は門外不出としておきたいという相反する意図は充分働いたであろうから、刊本に記載されていないことはかえって上記の相反する意図の存在をうかがわせるに充分である。

考 按

本論の最初でも述べたように、安中散は中国においてよりも、従来より我が国においてよく処方されて来ている。

安中散の我が国においての歴史を語るとき、享保十七年の『増広太平惠民和剂局方』の官刻本校刊の影響は大きかったであろうと思われるが、刊行以後直ちに安中散が広く一般に処方されるに至ったのではないようである。時はまもなく東洞流古方派の隆盛期を迎えることになる。

安中散がいつ頃から処方されるようになったのかについて、筆者が可及的に調査したところ、山脇東洋著になる抄写本処方集『傷寒門温胆』¹⁶⁾に

局方条文とほとんど変りなく安中散が収載されている以外は、江戸末期以後の諸書に見出すことが可能であった。

もちろん、増広医方口訣集(上・中・下巻、長沢道寿原本、中山三柳新增、北山友松子増広、村上勘兵衛刊、延宝九年)、刪補古今方彙(甲賀通元編著、梅村某刊、享保十八年序)、衆方規矩(編著者不詳、古文字屋市兵衛刊、寛保三年)、医療手引草(上編乾坤・中編上下・統編一二・別録上下、加藤謙齋著、高田清兵衛他刊及び河内屋太助刊、明和三年一天明四年)、及び医道日用綱目(本郷正豊編著、菊屋七郎兵衛他刊、安永九年)等々の江戸時代に普及していた処方書にも安中散は収載されていない。

成立年不詳の家伝禁方書などの写本を除外すれば、結局は19世紀に入ってから本格的に処方されるようになった。

筆者が調査した安中散の収載書は、先に述べた『蕉窓雑話』、『叢桂亭医事小言』、『証治摘要』の外、『浅井家日用記』¹⁷⁾、『方剂辞典』¹⁸⁾、『梧竹樓方函口訣』¹⁹⁾、『観聚方要補』²⁰⁾、『方読弁解』²¹⁾、『淵淵齋方函』²²⁾、『餐英館療治雑話』²³⁾、『校正方輿輓』²⁴⁾、『丹波家方的』²⁵⁾、『求古館方林』²⁶⁾、『清慎堂新験方略』²⁷⁾、『時還読我書』²⁸⁾、『内科秘録』²⁹⁾等々である。もちろん遺漏書は多々あるものと思われる。

それらの書のうちで処方内容と分量を共に明記している書は、『浅井家日用記』、『方剂辞典』、『観聚方要補』、『叢桂亭医事小言』、『方読弁解』、『淵淵齋方函』、『校正方輿輓』、『内科秘録』、『証治摘要』のみである。

『梧竹樓方函口訣』巻之二・反胃¹⁹⁾の本方の項には、「……今一等留滞ノ甚キ者ニハ附子ヲ加ヒ用テ宜シ……」とあって、本書には附子を加味するという独自の工夫が記述されているのが特徴である。同様に、『求古館方林』²⁶⁾にも、「○行蔵居ニ痛甚キ疲レノ見ニ附子ヲ加用ユ」との一文があり、やはり附子の加味が記載されている。『餐英館療治雑話』²³⁾、『丹波家方的』²⁵⁾には本方の出典について局方と記され、『清慎堂新験方略』²⁷⁾には宝慶新增方と記されている。また、『時還読我

書²⁸⁾に安中散の治験例が記述されている中で、安中散の補注として「辛螺ヲ以テ牡蛎ニ代」とあり、これは後世の『勿誤薬室方函』の散薬部に引き継がれている。

さて、『浅井家日用記』¹⁷⁾では、安中散は諸氣諸鬱の項に配され、特に条文もなくただ「吐水」とのみ注記されている外、局方指示通りの処方内容と分量が記述されているだけである。

『方剂辞典』¹⁸⁾では、筆者の引用本によれば、局方条文の「遠年日近」が「遠年近日」と改変されている以外は全く局方と異同はない。本書には文化五年の序がある。

『観聚方要補』は文政二年の刊行で、巻四・腹痛²⁰⁾の本方の条文には、「治遠年日近、脾疼翻胃、口吐酸水、寒邪之氣、留滯於内、停積不消、脹滿攻刺腹脇、及婦人血氣刺痛。」とあって、局方条文の部分的抜粋に留まる。処方内容と分量は局方と全く同一であるが、服用法については「右水煎服。本為散服、今改為湯。(筆者訓読：右水煎服ス。本散ト為シテ服シ、今改メテ湯ト為ス。)」とあって、この点は局方指示から自立して独自性を誇っている。なお、本書の条文は『勿誤薬室方函』にそっくり引き継がれている。

『方読弁解』巻之一・心腹胸痛 腹滿²¹⁾には、局方条文の「遠年日近」が「遠年近日」と改変されている以外は全く局方と同一である。出典については、局方聖濟と二書を併記している。方後には「此方元来反胃ニ用ニ甘草ヲ主トシテ良姜茴香乾姜ヲ佐トシ腹中ヲ温メル効アリ今癖囊病腹痛食ヲ吐シ甘ヲ好ム者ニ用テ大ニ効アリ……」とあるものの、良姜五分半の配合量に対して甘草は四分しか処方されていない。

『淵淵斎方函』²²⁾は文政十二年の刊行で、条文、処方内容、分量、服用法は全て局方と同一であるが、最後に「今煎服」との一文が追記されている。

『校正方輿輓』は嘉永六年の刊行で、巻之七・噎反胃癖囊 嘔吐惡心膈雜噎酸²⁴⁾の本方の条文には、「治遠年日近、脾疼反胃、口吐酸水、又治煩人、血氣刺痛、小腹連腰、攻疰重痛」とあって、これも局方条文からの部分的抜粋に留まる。処方

内容、分量、服用法は全て局方と同一であるが、続いて有持桂里の口授内容が記載されている。

『内科秘録』は元治元年の刊行で、巻之七・心痛²⁹⁾の本方の条文には、「治遠年日近、脾疼翻胃、口吐酸水、寒邪之氣留滯於内、停積不消、胸膈脹滿、攻刺腹脇、及惡心嘔吐、婦人血氣刺痛。」とあって、これも局方条文からの部分的抜粋に留まる。処方内容と分量は局方と同一であるが、服用法については「右七味煎服」とある。

以上の処方内容と分量とを明記した安中散の収載書のうち、局方指示に対する忠実度という点から諸書を分類すると、次のようになる。

1) 局方条文の踏襲

a) 局方と同一の処方分量

『方剂辞典』、『淵淵斎方函』

b) 局方と異なる処方分量

『方読弁解』

2) 局方条文の部分的抜粋

a) 局方と同一の処方分量

『観聚方要補』、『校正方輿輓』、『内科秘録』

b) 局方と異なる処方分量

なし

3) 独自の条文

a) 局方と同一の処方分量

『浅井家日用記』

b) 局方と異なる処方分量

『叢桂亭医事小言』、『証治摘要』

上記の分類をみると、『叢桂亭医事小言』だけが局方条文から独立した独自の条文を備え、しかも独自の処方分量を定めていることが分かる。また、『証治摘要』は『叢桂亭医事小言』を引用転載しているので、一応同一範疇に属するものとした。

このようにみて来ると、江戸末期に処方された安中散は、多くは局方指示と同一の処方内容と分量であり、服用法については局方指示から自立して水煎服が当初よりかなり一般的だった。また一部には重症のときには附子を加味する方法も行なわれたり、あるいはまた牡蛎に代えて辛螺を用いたりする方法もあったことがうかがわれる。

しかしながら、以上のような時流にあって、原

南陽が安中散に縮砂を加味して処方したり、その縮砂を去って牡蛎を三倍量処方して水煎服用したり、局方指示の条文を廃止し、単に癰囊病を治すと規定したり、あるいは食事についても酒、肉、麵、餅、一切の厚味、塩茶を忌むとして指示したりしたことは、非常に卓越した独自性を誇っていたと表現することができるだろう。

なお、食事については和田東郭も事細かに指示していたことが『丹波家方的』²⁵⁾にも引用されている。

最後に、現在の縮砂を配合した七味の安中散について付言すると、原南陽は縮砂を配合した八味の安中散を処方したが、『勿誤薬室方函』巻上⁷⁾には縮砂配合の七味の安中散が記載されていて、今日の一般的な安中散の処方と同一である。それ故、原南陽の縮砂配合の八味の安中散から乾姜を去り、七味としたのは浅田宗伯によるものである。

結局、局方指示の七味→縮砂配合の八味→乾姜減味の七味→今日の安中散となる。

しかし一方で、原南陽は局方処方のうちで牡蛎を三倍量とする安中散も指示している。これは今日の縮砂を配合していない『漢方処方集』⁹⁾にあっても、局方処方の分量比よりも牡蛎は二倍量多く、ここにおいても原南陽の影響をみることができる。

総じて、我が国の安中散の歴史においては原南陽の功績には特記すべきものがある。

結 論

1. 安中散は『太平惠民和剂局方』に、甘草、玄胡索、良姜、乾姜、茴香、肉桂、牡蛎が処方されているが、原南陽は更に縮砂を配合して八味として処方した。浅田宗伯はこの八味から乾姜を去り、七味として処方し、今日の一般的な安中散となった。

2. 原南陽はまた、『和剂局方』の七味のうち牡蛎を三倍増量して処方した。今日、縮砂を配合しない安中散においても牡蛎は増量されて処方されるので、ここにも原南陽の影響がみられる。

3. 中国よりも我が国でよく処方される安中散

は主に江戸末期以後の諸書に見出される。特に成立年不詳の写本を除外すれば、19世紀に入ってから本格的に処方されるようになった。

4. 我が国での安中散の服用法については、本格的に処方されるようになった比較的早期から、散剤としての内服と共に水煎服も一般に受け入れられた。

5. 『勿誤薬室方函』においては、安中散の条文は『観聚方要補』より引用転載し、また同書の散薬部の方後の一方を『時還読我書』の補注より引用転載している。

付記 中川成章著『証治摘要』の凡例³⁰⁾には、「……

而立後来江戸。入綱斎中川先生門。遂為養子。中川氏者。東洞翁之徒也。……（筆者訓読：……而シテ立チテ後江戸ニ来タリ、綱斎中川先生ノ門ニ入り、遂ニ養子ト為ス。中川氏ハ東洞翁之徒也。……）」と記されている。しかし、この綱斎中川先生がどのような人物か、筆者の文献検索の範囲では解明できなかった。もし御存知の先生がいられれば、是非御教授下さるようお願い申し上げる次第である。

また、本論文の完成にあたっては、杏雨書屋所蔵の『解毒奇効方』、『砒草』、『瘦狗傷考』、『寄奇方記』、『経穴彙解』、『痘瘡策』、『傷寒論夜話』、『南陽原子柔藏方』、『原南陽稿本』、『薬語』、『国書総目録』、『乾々斎架蔵和書目録』、『傷寒門温胆』、『浅井家日用記』、『方読弁解』、『梧竹樓方函口訣』、『校正方輿輶』、『丹波家方的』、『求古館方林』、『清慎堂親験方略』、『内科秘録』等々の諸書の閲覧に対して、衷情より謝意を表する。

また、京都大学附属図書館所蔵の『復坐録』の閲覧に対しても衷情より謝意を表する。

文 献

- 1) 日本医薬情報センター編：医療薬日本医薬品集，p.1489，薬業時報社，1995
- 2) 陳師文等編，橘親顕等校正：官刻増広太平和剂局方（復刻）上，p.256，燎原書店，1976
- 3) 矢数道明：安中散に就て，日本東洋医学会誌，Vol.4，No.3，pp.7-13，1954
- 4) 大塚敬節・矢数道明監修，気賀林一編：経験・漢方処方分量集，p.11，医道の日本社，1981
- 5) 龍野一雄編著：改訂新版漢方処方集，p.1，中国漢方，1991
- 6) 大塚恭男監修，北里研究所東洋医学総合研究所薬剂科編：漢方処方集，p.20，北里研究所東洋医学

総合研究所, 1995

- 7) 浅田宗伯纂: 勿誤藥室方函 卷上, 六十三丁裏, 勿誤藥室, 1877
- 8) 浅田宗伯纂: 勿誤藥室方函 卷下, 三十三丁裏, 勿誤藥室, 1877
- 9) 中川成章著, 陳存仁編校: 証治摘要/皇漢医学叢書 第二冊, p.17, 上海中医学院出版社, 1993
- 10) 和田東郭口授, 堀元益写: 蕉窓雜話 (写) 卷之一, 弘化二年
- 11) 原南陽口授: 叢桂亭医事小言 卷之四上, 十七丁裏, 東都書肆・青藜閣・水戸書肆・東壁樓, 文政三年
- 12) 原南陽口授, 大島員輯: 復坐録(写), 二十丁裏, 文化元年
- 13) 原南陽口授: 叢桂亭医事小言 卷之五, 五十五丁裏一五十七丁表, 東都書肆・青藜閣・水戸書肆・東壁樓, 文政三年
- 14) 森末義彰, 市古貞次, 堤 精二, 他編纂: 国書総目録 第五卷, p.253, 岩波書店, 1967
- 15) 藤浪和子編輯: 乾々斎架蔵和書目録, p.221, 藤浪和子, 1943
- 16) 山脇東洋著: 傷寒門温胆 (抄写), 徳川末期
- 17) 浅井図南著, 伊藤春益写: 浅井家日用記 (写), 諸氣諸鬱, 文化五年
- 18) 平岡嘉言著, 陳存仁編校: 方剂辞典/皇漢医学叢書 第十一冊, pp.53-54, 上海中医学院出版社,

1993

- 19) 百々鳩窓著, 曾我震斎写: 梧竹樓方函口訣 (写) 卷之二, 反胃, 文化十年
- 20) 多紀元簡輯: 觀聚方要補 卷四, 二丁表, 須原屋茂兵衛他, 文政二年
- 21) 福井楓亭著, 某正直写: 方読弁解 (写) 卷之一, 十五丁表一十六丁表, 文政十二年
- 22) 小林蒲溪口述, 沙門慧覚写: 淵淵齋方函 (写), 安, 慶応三年
- 23) 目黒道琢著, 山本巖述: 餐英館療治雜話, p.75, 第三医学研究会, 1991
- 24) 有持桂里口授: 校正方輿輓 卷之七, 四十三丁表一裏, 河内屋源七郎, 嘉永六年
- 25) 多紀某著, 平出延基写: 丹波家方的 (写)/普救堂叢書, 辭囊, 嘉永七年
- 26) 高階枳園著, 平出延基写: 求古館方林 (写)/普救堂叢書, 嘉永七年
- 27) 三角了察原本, 平出浦光抄写: 清慎堂親驗方略 (抄写), 十一丁表, 安政五年
- 28) 多紀元堅著: 時還読我書/杏林叢書 第二輯, p.230, 吐鳳堂書店, 1923
- 29) 本間棗軒著: 内科秘録 卷之七, 十六丁裏一十七丁表, 本間氏自準亭, 元治元年
- 30) 中川成章著, 陳存仁編校: 証治摘要/皇漢医学叢書 第二冊, p.1, 上海中医学院出版社, 1993

要旨 安中散は『太平惠民和剂局方』に、甘草、玄胡索、良姜、乾姜、茴香、肉桂、牡蛎と記載されているが、一般に今日の我が国では、桂皮、牡蛎、縮砂、延胡索、茴香、甘草、良姜と処方される。『勿誤藥室方函』の煎薬部には後者の処方が記載され、同書の散薬部には前者の処方が記載されている。江戸末期の『証治摘要』には、原南陽が局方処方に縮砂を加味して八味で処方したこと、また局方処方の牡蛎を三倍増量して処方したことなどが記され、『叢桂亭医事小言』には後者の処方が癖囊病を治すとの条文と共に記載されている。前者の処方は一門の秘中の秘であったかもしれない。一方、他書においても局方指示に拘束されず水煎服もかなり一般的となり、重症の留滞には附子を加味したり、また牡蛎の代りに辛螺を用いたりもされた。安中散は主に江戸末期以後の諸書に見出され、特に成立年不詳の写本を除けば、19世紀に入ってから本格的に処方されるようになった。

キーワード: 安中散, 縮砂, 原南陽, 証治摘要, 勿誤藥室方函